しかし、「ああ、いいにおいだった」は、珍しい。
実のところ、それどころか、
その時、僕の鼻は風邪ぎみで、つまっていた。

午前二時、丁度起床時間だ。

それから、何度か手を休めながら、
午後二時まで、代数の演習ばかりやった。

四時頃、父と母の二人で分担して、散髪してくれた。

まず、京太が先で、次ぎが僕だ。
父の腕は前の散髪の時より確かになった。
前のは本当に実験台であった。

目標、予定の線を過ぎると
急に気がたるみ出し、暇になった。

一緒に遊ぶ人もいない。

においの夢を思い出した。

おばあちゃんがブリキ缶の茶筒から、
番茶の葉を手づかみで出し、
鉄びんの中で、煮え立つ湯に入れると
部屋中で、プーンと、
香ばしい茶の匂いがした。
目を閉じて、その匂いを思い出していた。

82 大きくなって鈍くなったのかなあ・・・・・・・・362

Candy
in the Heart
364

萩原良昭